

秋岡英行・垣内智之・加藤千恵著  
『煉丹術の世界―不老不死への道―』

横 手

裕

本書は、秋岡、垣内、加藤の三氏による「煉丹術」についての総合的な解説書である。「あとがき」によれば、本書は三氏による長きにわたる綿密な共同作業を経て、7年餘りの歳月を経てようやく上梓されたという。

本書の目次を示すと左記の通りとなる（ ）内は各章の執筆者（敬称略）。

まえがき

I 煉丹術入門

煉丹術とは何か（垣内）

煉丹術の歴史（秋岡）

煉丹術の原理（加藤）

II 煉丹術の經典を讀む

『周易參同契』（加藤）

『抱朴子』（垣内）

『老子中經』（加藤）

『靈寶畢法』（秋岡）

『入藥鏡』（加藤）

『悟真篇』（垣内）

『丹房須知』（垣内）

補説 外丹の理論化（加藤）

『金丹大要』（垣内）

『性命圭旨』（秋岡）

『女丹合編』（秋岡）

参考文献 あとがき 著者紹介

まずは第一部と言ってよい「Ⅰ 煉丹術入門」では、「煉丹術とは何か」、「煉丹術の歴史」、「煉丹術の原理」の三篇を収録し、「煉丹術」なるものの概説、歴史、理論について、各執筆者がそれぞれ一篇を擔當して論じる。その後に第二部と言える「Ⅱ 煉丹術の經典を読む」に入り、『周易參同契』以下の煉丹術史上の重要經典をセレクトした上で、各經典それぞれについて、本文の文章を引用しながら丁寧な解説を施している。

本書を読んでまず印象に残るのは、全體的なバランスの良さということではないかと思う。私たちが研究対象を一般の方々に説明する場合、最も素直な方法は対象の歴史と内容を説明することが多いと思うが、本書では書

名に掲げた「煉丹術の世界」を解説するにあたり、まずはその概要を述べ、續いて歴史と内容についてのやや詳しい解説を加える、という方法がとられている。これは本書のように三人の對等な共同著者が一つの書物をまとめる場合、なるほど適切な方法であるように思われる。

また、煉丹術は大きく外丹と内丹に分かれるが、それぞれについての記述のバランスもおおむね穩當のように思われる。一人の著者による著作の場合、著者本人が専門的に研究してきた分野、時代などに記述が偏ったり、本人が強調したい部分に特に多くの紙幅が費やされる場合が少なくないが、本書はそのような偏向がほとんどないように思われ、安心して読むことができるように思われる。

さらに、「Ⅱ 煉丹術の經典を読む」では十の煉丹術の代表的經典を示して詳しい解説が行われる。専門的な研究を手がけたことのない人にとって、煉丹術や金丹術については漠然と知っていても、實際にどのような經典があるのかすぐにあれこれと思ひ浮かべることは難しい

のが普通ではないだろうか。本書はそのような場合にま  
ず考えるべき書物の基準を示してくれている點でなか  
なかりがたいであろう。また、ここで取り上げている經  
典の解説の多くは、その内容を概説するだけではなく、  
經典で展開される煉丹の具體的なプロセスとそれに關連  
する理論や概念などが比較的詳しくわかるような形で記  
述されている。各經典の解説を読み進めることで、煉丹  
術の具體的な方法についての理解を次第に深めてゆくこ  
とが可能であろう。

本書はこのように煉丹術の概説書としてはまとまりも  
良く、十分優れた内容となっているが、加えて私なりに  
若干ながら欲張った感想を述べてみる。

本書のような書物には、索引があると大変ありがたい  
ように思う。本書は専門書ではないが、道教などについ  
ての一般の概説書でもない。すなわち、かならずしも一  
般性があるわけでもないやや特殊な領域を解説する本で  
あるが、煉丹術や不老不死について少々突っ込んだ内容  
に及んでいる。一般の辭書では間に合わない、やや専門

性のある本書に索引があれば、一歩進めて理解したい  
人々には助けになるであろう。加藤氏の「あとがき」に  
よれば、「當初、本書はさらに煉丹術のキーワードおよ  
び煉丹術關連圖像の解説を加える構成を豫定していたが、  
それらは見送ることにした。宿題として、近い將來かた  
ちにできればと願っている」が、煉丹術のキーワード集  
のような續編が作成されることを期待したい。

それから、煉丹術は中國文化の中で一定の役割を持っ  
ており、思想や信仰はもちろん文學や自然科學等の文化  
の中のさまざまな部分と關連していることはよく知られ  
ている。そのような、中國の文化史上の役割についての  
解説があるといっそうよいのではないかと思われた。I  
の部分で若干觸れられてはいるが、とりわけ道教や中國  
醫學とは深い關係にあつたであろう。さらに言えば、道  
教の中でも全眞教は内丹術としての煉丹術を修鍊悟道の  
ための根本的な方法としている教派であり、全眞教が廣  
まり社會に定着した明清時代になると、内丹術も全眞教  
と何らかの意味で關係しないではいられなかったように

も思われる。全真教の成立や展開とのかかわりなどについてもある程度の説明があるとよいのではないかと思われた。

それから、Ⅱで取り上げる「煉丹術の經典」の選擇については、おおむね首肯できるように思うが、あれこれと別案も思い浮かぶ。たとえば本書では『靈寶畢法』を取り上げているが、多くの研究者が知る通り、この書は『鍾呂傳道集』とはほぼ共通する内容を述べており、その内丹術は「鍾呂金丹派」などと呼ばれて昨今の道教の概説書等では大抵の場合取り上げられるのではないかと思う。この『靈寶畢法』と『鍾呂傳道集』を比べた場合、後者の方が歴史的に著名であるように思うので、どちらかといえば後者を取り上げた方がよいのではないかと思われた。これらの初出の一つと指摘される曾慥編『道

樞』でも、『鍾呂傳道集』の抜粹である「傳道上篇」「傳道中篇」「傳道下篇」の三篇が同書の卷三十九、卷四十、卷四十一の三卷に分けて收録され、その次に『靈寶畢法』の抜粹「靈寶篇」が簡略な一篇のみで卷四十二と

なっていることも参照されよう。ただし、『靈寶畢法』の方が修鍊プロセスの記述が若干クリアであり、内容を明示しやすいようにも思われるので、そういう点ではこの選擇も一定の理解はできなくはない。またその他の經典も難しい選擇であることは十分わかるが、たとえば清代後半から民國にかけて内丹術に關心を持つ人々に影響の大きい『伍柳仙宗』なども有力候補になるのではなからうか。『伍柳仙宗』のうちの一書である柳華陽『金仙證論』は伊藤光遠によって和譯されて『煉丹修養法』となり、わが國で知る人ぞ知る一書となっているなど、その影響は日本にも及んだ。これらのいわゆる伍柳派の書物も煉丹術の代表であり、内容は明示しやすいのではないかと思われる。

あるいは、本書では「煉丹術」という言葉でもつばら論述がなされているが、これは「金丹術」という表現でも同じであるということをごどこかで記した方がよいのではないかと思われた。冒頭でその區別に關わる一言が述べられており、違いを考えるべき場合もあるかもしれない

いが、長い歴史の中で一般的には「煉丹術」（または「鍊丹術」と「金丹術」）は、ほとんどまったく同じものを指しているように思われる。あるいは「黃白術」もそう思える場合が多い。そのあたりの事情を少々記しておく方が、何がどう違うのかと悩んでしまうかもしれない一般の読者には親切なのではないかと思われる。

その他、三人の共同執筆ということもあつてか、重複した内容を述べる部分がいくつかみられることもわずかながら氣になった。

ともあれ、加藤氏の「あとがき」にも記されているように、執筆者の三人は大阪市立大學大學院で三浦國雄先生に學ばれた長年の學友であつた。このような學友と、大學院生の頃と同じように研究會を行つて遠慮なく議論し、共同で仕事を成し遂げるようなことは、昨今なかなかないのではないかと思われる。執筆者のお三方を大變羨ましく思うとともに、このような研究者たちを育てた三浦先生の師徳に改めて敬意を表したい。

前述のように、本書は書名に掲げる「煉丹術の世界」

について、ほどよいバランスで上手にまとめてあると思う。中國の「煉丹術」に關心を持ち、理解を深めようと本書を手にとつた方々は十分な満足が得られる一書になつていと言えよう。

（四六判、二五三頁、二〇一八年一〇月、  
大修館書店、一七〇〇圓（税別））